

小田原史談

第67号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-2-15

年頭のことば

小田原市長 中井一郎



昭和四十八年の新春を迎え、謹んで御祝詞を申し上げます。

小田原史談会も結成以来早へも十八年目の春を迎えたのであります。この間史談会が郷土のあらゆる面にわたる調査、研究をされ、有形、無形の文化財の保存に、又史跡めぐり、展覧会などを通して市民の郷土に対する認識を深めるなど幾多の業績を残しておりますことは今更云うまでもないと思われまふ。これも会員各位の郷土愛に燃える精神

員各位におかれてはそれぞれ立場で調査研究を進められて郷土の正しい姿を明らかにされ、市民の郷土に対する認識を深めるよう努力していただきたいと思ひます。

その昔、後北条氏時代関八州の首都として栄えた小田原が、今人口十六万を越えて県西における中心都市として新しく発展しつつあります。

年頭のあいさつ

会長 中野敬次郎

○元旦や今年もあるぞ大晦日(山雪)

これは二宮尊徳が或年の正月に詠んだ句であって、白雪は彼の俳号である。

最近依頼をうけて二宮尊徳の和歌と俳句という文を書かされたので、この際にして尊徳の作った和歌一寸と驚いた。この方面で

宸題「童」

今朝東風来。小庭梅花開
幼童戲羽子。老童唯重杯
癸丑歲旦 流霞(北村宏)

芝居と雨

神保栄

曾我で往昔から曾我の夜討の芝居には必ず雨が降ると言われて居る。昭和四年八月一日二日三日と曾我商

も彼は天才人である。大晦日の翌日は元旦であるが、元旦から勘定すると大晦日は三百六十五日である。一年は長いようだがまたたくまに大晦日がやってくる。しっかりせよと

尊徳は三十六才のとき小田原を去って、北関東の桜町に行き、その復興に十五年間の精魂を傾けて完成した。毎日筑波山を眺めながら事業にはげんだ。

その桜町(今の栃木県二宮町)の物部神社の境内に一碑があって尊徳の句が刻されてある。

○不二は申さず、まず紫の筑波山 尊徳詠句の絶唱である。大それたことを望むのではない。吾等には吾等なりの理想を持って、そして謙讓の心持をも失わず持つて自己の教養をつけることと郷土の発展につくすためにつとめよう。今年も、いや今後永く小田原史談会の願

○この秋は雨かあらしか知らねども 今日つとめに田草とるなり(尊徳)

賀正

会長 中野 敬次郎
副会長 加藤 誠夫
香川 政治
山崎 益太郎
専門部 一同
企画部 一同
編集部 一同
理事 一同

氣高くて親みのある道了尊

加藤 誠夫



れましたが、いつも道了様は禪師と共に従って行き、師の御身廻り一切の仕事の御援助をなさいました。

御修行の道了様 道了尊は、只今では道了大薩摩として大雄山に御祀りしてある尊い御姿の神様であります。

今を去る事五百有余年の昔、大雄山最乗寺開祖了庵慧明禪師と申される大変おえらい御坊様の後をなされた御方で、本名は妙覚道了と申し上るのであります。慧明禪師が、未だ総持寺に居られた頃に、御出になつて、禪師に就いて御弟子となり、其の時に出家得度をなさいました。そして、名を妙覚道了と呼ぶ事になりました。

此の道了は、師の禪師の元で、曹洞宗の僧として修行をなさいました。それ以来師が近江の総寧寺、越前の龍泉寺と転ぜら

って、大峯山に御登りなされた折に、其の山中で、悪鬼妖魔が現われて、法親王の行列の先頭の者共が、一歩も前進出来なくなつてしまったことがあります。其の時、同行の中に三井寺の南院金乗坊に住んで修行していた、満位の行者道了様が、仏法の為に、のみ使う御弓を引いて矢を天空に放ち四方を邪悪より結会して、清浄の陣立てをして自ら法の為にのみ振るう斧を持って彼等邪悪妖魔をすべて退治せられて、法親王の大峯山入峯を無事に行つたのでした。又、康応元巳年(一三八九年)五月二十日に宝蔵院の大徳定助が園城寺の長吏と言う重い御役に御出世なさいました折に、其の時の御祝の大法要

がありました際に、其の時の行事奉行が理覚院の頼昭伽陀の役目が定光房敬果で梵唄の御役が善賢院の房誉御仏に對して散華の御役柄は、相模房の道了様が承はり、御廻向が前大僧正良瑜鉢の御役目が大泉房良慶が御受けになり、其の他式衆の僧侶が六十口、外に堂外の衆僧七百二十口と言う中々盛大な御法要が金堂で執

行されたとのことです。其の後康応二庚午年(一三九〇年)正月十八日、大僧正が足利義満の御邸に御呼ばれになつて、將軍から尊星王法の御供養をおたのみになられた時にも、一所に同行されましたが、此の時にも、道了様は、大層おえらい行者に御出世になつておられて、金台兩部自性法身の行者として、足利將軍の御依頼になつた大事な修法の一役をお勤めになりました。

そして又其の月、正月二十八日には、相国寺へ御行きになつて、十種供養があり、房淳が導師をして、相模房の道了様は、仮座十一面觀世音菩薩の秘法の御供養を勸修なさつたのでありました。

下曾我遺蹟 (上)

内田 武雄

それ以来、三井寺では、道了尊の御姿を見ることが出来なくなつてしまつたのだと、園城寺では伝へています。其の後は多分、恩師了庵慧明禪師の元へ飛び来つて師の元に居られた事であろう。其の翌年、応永元年甲戌

遺蹟は現在の下曾我病院敷地内、その昔は、このうみ(國府海)と言う沼地で曾我山の四つ(岸太郎)谷津田、殿沢、劍沢の水が流れこんで、小さな水海となり、小田原北条氏のころはこの付近に茶亭をたて家臣の憩の場と鶴の番人をおかねて水鳥の保護をくわえたほどの沼地であった。小田原大久保公の天保初年頃には、今のようにたんぼになつたことが千代三嶋神社の入口にある水雨天碑でもわかる。

昭和卅二年より三年間奈場所は國府津から東海道線と分岐して御殿場線に入ると國府津の次の駅が「下曾我」である。この附近は東に曾我山が南に走り、そ

の西側は断層崖となつて、山麓には扇状地の発達が弱い、いわば新しい断層線である。この山麓から、今の酒匂川にかけての氾濫平野には、複雑な三角洲が散在している、しかも、それは何回もの酒匂川の変更によつてさらに複雑に浸食されたり接合したりして、その上には集落がのり集落の周囲には小田原名物の梅干の材料になる梅が、春には美しい花を咲かせる。

遺蹟は下曽我駅線路をへだててある曾我病院の広い敷地の北側に横たわるこの三角洲の一つ下に埋れて発見された、この三角洲は一メートルづつぐらいの厚さの、箱根火山泥の流下再堆積したと思われる、このローム層上に遺物は発見されたが、その遺物層は、二層に分かれ、下層からは弥生式土器多数と同時代の建築用材、井戸わく、水田用の木材および多くの土器が発見され、さらに五〇センチメートルほどの冠水による堆積層（これも軽石と細砂を多く含み、粘土と、点々と黒色有機物を含んでいる灰黄白色層）をへだてて上に奈良時代直前頃から平安

時初期までの建築用材、木器、井戸わく、土師器、須恵器、稜袖陶片、木簡、銅鏡まで出す層が存在した。さらに、その上には二メートルほどの冠水堆積土がのり、その表面に現在の耕作表土がのっている。したがって二〇センチメートルほどの有機物包有の耕土下二メートルをへだてて包含層に達し、上部包含層の器や建築用材などは大部分下に中間層をへだてて下部包含層になっていた。その

下には、いくたの板をかさねたようにきそく正しい層理を示しているが、その一カ所からまるで涌水のように水が流れ出ている所がある、この水が弥生時代、奈良、平安時代にもこの集落の中心であったとみえる、この涌水の出る所に井戸わくをくんで流路の両側に板杭でとめ護岸工事施、木器や建築用材などは大部分下に中間層をへだてて下部包含層になっていた。その



中村社 白髭明神奉射祭

竹見 竜雄

当社は中村郷中きつての古社である。文治年間（鎌倉初期）に記された縁起によれば、奈良朝の頃僧行基行脚の砌り云々とあり、次で鎌倉の始めこの地の豪族中村氏が、社殿楼門等を再建、中村社の社号や郡中惣社の称号を奉り、將軍頼朝公は高座郡渋谷庄に六町歩

の御神地を奉る等が記してある。降つて足利尊氏、北条早雲等その時々の武将の尊信も篤く、下ノ中村郷の総領守であるが、この社に古くから伝わる奉射祭といふ御神事がある。

時は正月七日、古くは東天に旭日が昇る時刻であったが現在は午前九時。まずこの日の射手小宮一族二名位儀を正し拜殿に於て、宮司の祝詞、修祓に身を深め弓矢を持して所定の処に着く。境内社の東方には大きく、その的には害鳥を形

どつた椿の木の小鳥三つを吊し、又射る所との中間北側には、神机にお散米（おさんごう）を盛つた三宝があり、二番射手がそこに見守る中に、先ず一番射手が満月こ引きしぼる、一方お散米を散く、と同時に第一矢が放たれる。かくして三矢、次で交代して二番射手が三矢、又交代して一矢、都合七矢が射られるが矢が的に当る度に観衆からワアツと歓声が湧く。そして最後の矢ともなれば、矢が放たれると同時に氏子民が我先にと的に飛びこんで、小鳥を奪ひ合ふ。所謂的破りである。昔からこれを戸口に吊すと悪魔払いであるといふ。これで御神事は終るのであるが、この神事を昔から「やぶさめ」と俗に称している。ところが前記古文書を考察すると

文治六庚戌年（一一九〇）の条に「青陽日宝前献七種之朔射毘沙之的等蓋□（以明且既即為天長地久武運長榮諸人快樂也此日中村殿云々」とあるが、この毘沙は奉射の宛字であつて流鏑馬（やぶさめ）ではない尤もこの社にはその頃流鏑馬も中村公によつて奉納されておつた。同書文治五巳酉年の条に「今歳九月重陽日於神前經流鏑馬（馬が欠字）云々とあり、又建久三壬子年の条にも「菊月重陽日（中略）明十日於神前令騎流鏑馬」とある。凡らく混同されて今日に及んだものであろう。

而らばこの奉射とは一体何か、奉射は歩射、流鏑馬との区別であるが歩射は古いと古い。神に奉納なされる弓神事に、今日流鏑馬、引目、奉射の三つがある。流鏑馬はこの社に今はないが、鶴ヶ岡八幡宮や寒川大社では現在も奉納されている。引目は養目とも書き之れも大山さんや三ノ宮社で奉納されている。さて奉射は大古我々祖先は鳥獸の捕獲に、或は戦に弓矢はなくしてはならぬ重要な具であつた。凡ら千の始めにこれが射始めを行い、之れが神に奉納なされ、今も由緒ある古社では奉納されている。尚かこの歩射、奉射も大年も統一している。

新春青陽旭日昇 奉射弘魔祈豊穰 星霜千歳伝今日 鎮守古社幾幾神

ある。 当明神の奉射祭は後記即ち年占い神事である。 その理由を列記すると、（一）当社は正月七日に執行している。この七日は昔貴族社会に於ては、五節句の筆頭として大変祝つた日であるが、一般庶民はこの日を人日（じんじつ）と呼んで年の始めに当り、その年の吉凶を占ふ極めて大切な日であつた。（二）的に矢が当るごとに歓声が湧る、当り即ち豊作の意である。（三）七矢を射るが二人の初矢は試矢で、五矢は即ち五穀を表わす。等々からである。而かし害鳥を表わす椿の鳥は、七草を叩く呪言「唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に」の如く害鳥を射払ふ意であり、年占いにこの私の意を合わせた言はば、五穀豊穰、今日の言葉をか

りれば全産業祈願である。尚この射手小宮家は、宮司中村家と共に前記古文書にも記してある旧神主で八百年も統一している。

（一）当社は正月七日に執行している。この七日は昔貴族社会に於ては、五節句の筆頭として大変祝つた日であるが、一般庶民はこの日を人日（じんじつ）と呼んで年の始めに当り、その年の吉凶を占ふ極めて大切な日であつた。（二）的に矢が当るごとに歓声が湧る、当り即ち豊作の意である。（三）七矢を射るが二人の初矢は試矢で、五矢は即ち五穀を表わす。等々からである。而かし害鳥を表わす椿の鳥は、七草を叩く呪言「唐土の鳥が日本の土地に渡らぬ先に」の如く害鳥を射払ふ意であり、年占いにこの私の意を合わせた言はば、五穀豊穰、今日の言葉をか

りれば全産業祈願である。尚この射手小宮家は、宮司中村家と共に前記古文書にも記してある旧神主で八百年も統一している。

新新春青陽旭日昇 奉射弘魔祈豊穰 星霜千歳伝今日 鎮守古社幾幾神

千代台の古瓦

富田 千春

子供の頃、千代の中心部で小高い、火の見のある「台の塚」によく遊びに行っていた。そこには夥しい古瓦が寄せられてあり、それを玩具に遊んだものだ。「千代には昔お城があって、この瓦は布目瓦というのだ」ときいた。千代台地の周囲はどぶっ田という深い水田が

千代台には、弓削道鏡が下野国に下向の時孝謙天皇から賜わった木像の御持仏塚等に放り出したり、川などに捨てに行つた。土にまみれた古瓦は邪魔物で、何の魅力もなかったが、軒先の丸瓦(鑑瓦)は形が変わっているの、以前から持ちかへて保存している家が大分あった。

千代台の古瓦が、まともに出たのは自分が千代中学に勤めていた時、新制中学の校舎建設で、用地に千代台の土を運んだ時である。第一回目が、昭和二十三年暮から二十四年に、第二回目が二十五年から二十六年

千代台には、弓削道鏡が下野国に下向の時孝謙天皇から賜わった木像の御持仏塚等に放り出したり、川などに捨てに行つた。土にまみれた古瓦は邪魔物で、何の魅力もなかったが、軒先の丸瓦(鑑瓦)は形が変わっているの、以前から持ちかへて保存している家が大分あった。

が、校長が変れば後はどうなるか分らない」という人がいた。「学校に郷土室かこの地に郷土館を作ろう」と説明した。だがその人の予言の通り、二十六年五月急に転任になり、出土品も未整理のまま出てしまった事は誠に残念であった。ただ千代にも度々見えた、石野英先生が、県文化財調査報告第二十集に「湘西酒匂平野の史跡と文化財」の題で千代出土の古瓦について詳細に記録し写真までつけて本にまとめて下さって本当に助かった。(昭和二十八年九月発行)

加藤誠夫さんもその頃よく見えて協力して下さいました。棟の「しび」か文字瓦が欲しいね、とのこと、しびは遂に出なかったが、山と積まれた土の瓦の破片を放課後一枚一枚丹念に調べて、やっと文字瓦三枚を見つけ出したこと、三月七日用土の中で雨にぬれている「ブドウ唐草文の軒平瓦」を見つけ出すことが出来たこと

小田原さんより

「姓」を賜う

鈴木平八

当時の吾が山間の里は現金で箱根越えの作業にも従在のように温州みかんの栽培はなく、わずかに柑子みかんが植えられて主として粟麦などの雑穀と、名産であったと云う里芋等を作つて細々暮らしていたようである。この頃の片浦地方の里芋は味が自慢で度々小田原サン(城主)に献上もされたそうであります。少い夜か?、天明の地震即ち三年正月二十三日の時か、残念ながら分らないのですがとにかく小田原城は大被害を受けその石垣の復旧作業が早速殿様の命で始まりまた、小田原宿を諸大名が通過する際は、人夫頭からの

業を続けていたある日、一つの大石に当り数人で大力を出し合つてもどうしても目的の所へ運ぶ事が出来な、勿論現在の様な機械はありませんが、四苦八苦の大奮闘ですがどうにも動かない、其の様子を一人当村出身の久蔵(間違っているかも)は腰を下して短いキセルを口にくわえて眺めていたらしい、其処へ突然と殿様が部下を伴れて見廻りに来た、早速お叱りを受けた事は言うまでもありません。久蔵はあわてる様もなく、やおらキセルは腰に治めて立上り、大勢の同輩に向つて「俺にまかせろ」と一言して只一人でその大石を動して目的の所へ置いたのです。殿様も驚いた、今度は早速おはめの言葉と変わつて。

「其方の望みを申せ、何でもつかわす」と、久蔵恐る恐る「酒が好物です」と申上げる、早速殿様より小田原城下町中での酒店で無料で飲める「証」を頂いた其の上、一般の人々では姓をつけられない時代に「一斗」の姓を賜はったのです。一家一門の榮であります、全国的にみても珍らしいこの「姓」一斗は現在の戸主「一斗博明」として繁栄を続けて居ります。米神を誇りの一つであります。